

日本都市社会学会ニュース

No. 70 (2005.3.25)

発行：日本都市社会学会

事務局：〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部社会学科 後藤研究室内

E-Mail: UrbanSocio@chs.nihon-u.ac.jp

FAX: (03) 5317-9423

(郵便振替口座: 00140-4-703976)

ホームページURL: <http://www.soc.nii.ac.jp/urbansocio/>

日本都市社会学会 第23回大会

歓迎の言葉

大妻女子大学 山岸 健

1999年、平成11年、4月、多摩のアクロポリス、小高い丘、ふたつとないトポス *τοπος* に姿を見せた大妻女子大学の人間関係学部、このトポスと学部で日本都市社会学会の大会が開催されることは、大妻学院と大妻女子大学、とくに人間関係学部の関係者にとって、ほんとうにうれしいことです。学会と学会活動に大学がどれだけ貢献できるかということは、大学にとって大切な課題と思われるからです。

この学部の社会学専攻では、高橋勇悦先生、秋元律郎先生、そのほか気鋭の研究者を迎えて、幸いなことに当初から十分に満足すべきかたちを整えることができました。人間関係学部は、すでに成熟期に入っているように思います。

都市研究、特に社会学の視点からのパイオニア、奥井復太郎先生の蔵書が、二千冊以上、大妻女子大学の多摩図書館に収蔵されていることは、まことに意義深いことではないかと思われます。こうした蔵書をどうぞご活用いただきたいと思います。多摩のアクロポリスが、これから日本における都市研究のひとつの発信地となるならば、まことに幸いなことと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

高橋先生、久保田先生、とともに先生方を初秋のアクロポリスにお迎えして、多摩の原風景、谷戸と谷戸の山地、谷戸の岬などをごらんいただきながら、学会の活動を展開していただくことは、まことに意義深いことではないかと思われます。

大妻コタカ先生には、「人間学を学びとる」という言葉があります。人びとの日常生活と人間に注がれた〈まなざし〉が、この言葉には感じられます。大妻学院、大妻女子大学のシンボルは、糸巻です。糸巻とともに人びとの生活とそこで人びとが生きている世界がクローズ・アップされてきます。

現代は、まことにさまざまな生活問題、社会問題、環境問題、人間の条件などが、つぎつぎにクローズ・アップされてくるような時代です。時代の動き、人びとの日常生活、都市生活と都市の変化、人びとの生活環境に見られる変化、社会的現実——今日、ますます注目されつつあるモチーフです。

都市社会学の方法とアプローチ、社会的実践、実証的調査、応用研究などの諸分野において、様々な視点からの研究の展開がますます期待される時代が訪れております。

1. 日本都市社会学会 第23回大会開催について

期間 2005年9月6日(火)～7日(水)

会場 大妻女子大学 多摩キャンパス 人間関係学部

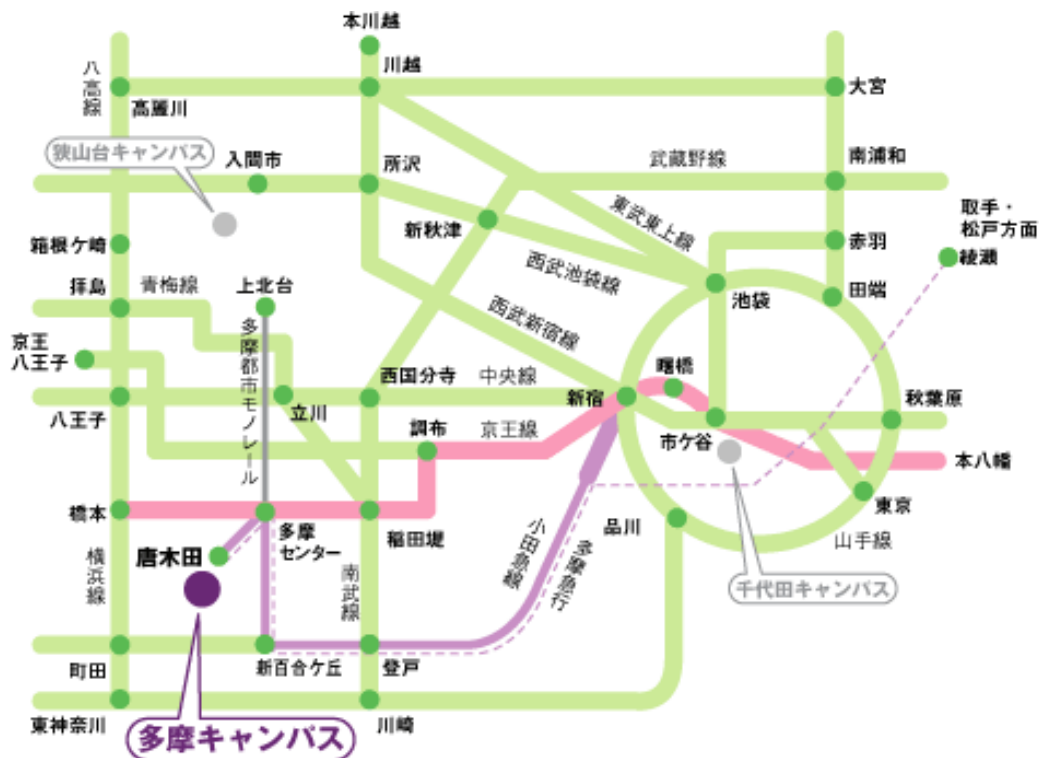
〒206-8540 東京都多摩市唐木田 2-7-1

(小田急多摩線唐木田駅下車 徒歩5分)

大妻女子大学人間関係学部のHP：<http://www.hum.otsuma.ac.jp/>

2. 交通・宿泊の案内

大会会場となる大妻女子大学多摩キャンパスは、小田急多摩線唐木田駅下車、徒歩5分のところにあります。小田急線の新宿駅から急行に乗り換え、新百合ヶ丘駅で多摩線に乗り換えて、終点が唐木田駅です。京王線の新宿駅から橋本行き急行などに乗り換え、多摩センター駅で小田急多摩線に乗り換えて1駅目が唐木田です。都心(営団地下鉄千代田線)と唐木田駅をダイレクトに結ぶ小田急線の多摩急行もあります。新宿からの所要時間は、1時間+αです。



宿泊は、キャンパスに比較的近い場所でしたら多摩センター周辺、都心部でしたら新宿周辺をおすすめします。以下、主要な宿泊案内/予約のポータルサイトを紹介しておきますので、ご希望に沿ったホテル/宿を探していただければ幸いです。

宿サイト

「楽天トラベル」旅の窓口

じゃらん.net

ベストリザーブ

宿泊の王様

比較.com

一休.com

旅んこ玉っち

好きです旅行

<http://yado.st/>

<http://www.mytrip.net/>

<http://www.jalan.net/>

<http://www.bestrsv.com/>

<http://www.hotel-king.com/>

<http://www.hikaku.com/kokunaihotel/>

<http://www.ikyu.com/>

<http://www.tamatti.net/>

<http://sukidesu.cool.ne.jp/yado/>

会員の皆様へのお知らせ

1. 自由報告の募集 申し込み方法が大きく変更されました。

第 23 回大会の自由報告を募集します。このところの自由報告申し込み件数の増大傾向を受け、第 23 回大会では自由報告部会をより一層充実させ、大会初日の午前と午後、2 日目の午前の 3 時間帯で開催する方向です（第 22 回大会は初日午前と 2 日目午前の 2 時間帯で計 4 部会を開催しました）。どうぞふってお申し込み下さい。

なお、2004 年の第 22 回大会より、自由報告要旨集の大会時発行を止め、要旨を大会前のニュースに掲載する方式に切り替えましたが、一挙に全面的な変更を行うと混乱を来す可能性が高いとの判断から、自由報告の「申し込み」と報告要旨の「提出」を別々に行う二段階方式だけは継続させました。

しかし、第 23 回大会からは、既定の方針に従って（2003 年 10 月に開催の理事会並びに企画委員会で決定した通り）従来の二段階方式を廃止して、日本社会学会と同様に自由報告の申し込みと報告要旨の提出を同時にしていただくことになります。

自由報告を希望される会員は、下記の要領で、自由報告の申し込みと自由報告要旨の提出を同時に行って下さい。

(1) 自由報告の申し込み及び報告要旨の提出方法（締め切り：6 月 10 日(金)）

報告タイトル(仮題は不可です！)、報告要旨(1000 字以内《厳守》)、使用機材の有無、報告者氏名・所属、連絡先(住所・電話番号・E-mail address)を A4 サイズ 1 枚以内に記し、それらを保存した文書ファイルを、6 月 10 日(金)午後 6 時までに学会事務局(UrbanSocio@chs.nihon-u.ac.jp)宛に E-mail に添付してお送り下さい。なお、機材の使用については、会場の都合により不可能となる場合もあります。また、申し込み締め切りを過ぎたものについては一切受け付けないことになっています。メンテナンスなどのためにサーバが一時不通になることもありますので、余裕を持って申し込み/提出されるようお願いします。

(2) 注意事項（必ずお守り下さい！）

お申し込みいただけるのは共同報告者で登壇されない方も含め、都市社会学会の会員に限ります。なお、未入会の方が報告を希望される場合は、申し込みを行う以前に、入会の手続きをお済ませください。ファイルは、原則としてテキスト形式とします。Microsoft Windows を基本ソフトとするパソコンで作成したものに限り、「Microsoft Word」形式でも結構です。

「報告の要旨/サマリー」を会員に事前にお知らせすることを目的としていますので、図表は入れ込まず、文章だけにしようお願いします（学会ニュース 1 頁に 2 報告の要旨を掲載します）。

この要領に反し、本文が 1000 字（1 行 40 字で 26 行）以上であったり、図表が入っている場合は、数日以内に訂正をお願いすることになります。また、期限内に訂正されない場合は、報告を放棄されたものとみなしますので、ご注意下さい。

大会当日にレジュメ/資料を配付する場合は、各自で別途ご用意下さい。

<自由報告申し込みと報告要旨原稿の提出>
締め切り：6 月 10 日(金) 午後 6 時までに必着
申し込み/要旨原稿提出の方法：E-mail による
申し込み/要旨原稿提出先：学会事務局 UrbanSocio@chs.nihon-u.ac.jp

2. 理事会報告

昨年12月11日(土)午後4時から日本大学にて2004-05年度第1回理事会が開催されました。本理事会では、学会賞選考委員会の立ち上げと委員委嘱、日本学術会議会員候補者の推薦、日本都市社会学会年報バックナンバーのセット販売(詳細は本ニュース6頁をご参照下さい)、などの事項について審議が行われました。

このうち日本学術会議会員候補者の推薦について若干のご報告を行います。理事会前に日本学術会議から学会事務局へ会員候補者の推薦の依頼が届きました。そこで急遽常任理事会を開催して検討を行い、そのうえで本理事会にて審議の結果、当学会としては波平勇夫会員、三浦典子会員、吉原直樹会員、町村敬志会員の4人の方を候補者として推薦することになりました。当学会への割当推薦数は4、そのうち女性・地方在住・50才未満などの条件がついておりましたので、熟慮の結果、このような結果となりました。ご報告申し上げます。

(常任理事 玉野和志)

3. 企画委員会報告

第23回大会では、2日目(9月7日)午後に次のようなシンポジウムを開催することになりました。

都 市 と 若 者 ——都市の若者と若者の都市の交わるところ——

【趣 旨】

現代日本の都市は、グローバル化、情報化、産業の構造転換、少子高齢化のなかで、大きな変化を遂げつつある。本シンポジウムは、若者の文化、意識、行動を手がかりに、都市の変化を探ろうとするものである。

都市はこれまで、「社会の変化の先端にある」と捉えられてきた。とくに、グローバル化が進行する中で、グローバル化によって都市のあり方が大きく規定されるようになった。都市間競争も、国内の都市間でのみ行われるのではなく、世界経済の舞台の上で展開されている。都市の内部では、グローバル化にあわせて、エスニシティの多様化が進行してきた。こうしたなかで、日本の若者は世界各地の都市を彷徨すると同時に、日本の都市内部でも、世界からやってきた若者が日本の若者と交錯しながら、あらゆる場所に入り込むようになってきた。

都市は文化的な複合体である。伝統的な文化を継承する場であると同時に、新しい文化を創造する場でもあった。都市社会学では、これまで、都市文化や都市祭礼、都市の下位文化として論じてきた。特に、情報化が進む現在、バーチャルな情報空間が、物理的な都市空間のあり方を大きく規定している。こうしたなかで、若者たちは現実的な都市空間とバーチャルな空間を使い分けながら、都市を生きている。

さらに、現代都市の様相を大きく変えようとしているのは、産業構造の転換と、それにもなう就労構造の変化である。日本はこれまで、完全雇用に近い状態がつづき、さらに、その雇用は終身雇用をモデルとした安定的なものであった。こうした産業と雇用のあり方が、日本の都市社会を安定的なものにしてきた。しかしながら、現在、若者を中心として転職率が高く、派遣社員、フリーター、ニートといった「新しい就労(あるいは、就労しない)形」が出現している。こうした産業と就労の変化が、都市社会を大きく変えようとしている。

本シンポジウムでは、こうした大きな変化を経験している現代都市を、若者を基点に考察してゆこうとする。このことは、「都市にとって若者のもつ意味」を考えることであると同時に、「若者にとって都市のもつ意味」を考えることである。

【報告者】 有末 賢 (慶應義塾大学) 都市空間の匿名性と若者の社会関係
——フラグメンテーションと下位文化——
小谷 敏 (大妻女子大学) 子ども・若者の問題は都市問題である(仮)
羽淵 一代 (弘前大学) 青年のメディア利用がもたらすもの
——接触人口の増加とその影響——

【討論者】 高橋 勇悦 (大妻女子大学/東京都立大学名誉教授) 新井 克弥 (宮崎公立大学)

【司 会】 早川 洋行 (滋賀大学) 田中 重好 (名古屋大学)

(常任理事 田中重好)

4. 編集委員会報告と『日本都市社会学会年報』24号(2006年発行)

自由投稿論文・研究ノートの募集について

編集委員会報告：

編集委員会は2004年9月5日(第1回)、10月9日(第2回)、12月11日(第3回)の計3回開かれました。『年報』23号は第23回大会(大妻女子大学)で会員の皆様に配布する予定です。今回の年報では、昨年の第22回大会で開催された公開シンポジウム「都市空間に働く権力作用と人間—大阪をインナーリングから読み解く—」を特集します(特集タイトルはサブタイトルを用います)。報告者の論文と当日の司会者による解題を執筆いただいております。なお、シンポジウム「住宅政策と都市社会学—政策形成における都市社会学の可能性—」については、担当企画委員の会員に「要旨」を書いていただいております。その他、例年どおり自由投稿論文、書評論文、書評などが掲載される予定で、目下、編集作業を行っています。なお、『年報』に関するご意見、ご要望がありましたら、お気軽に編集事務局までご連絡下さいますようお願いいたします。

『日本都市社会学会年報』24号(2006年発行)自由投稿論文・研究ノートの募集：

編集委員会では、『日本都市社会学会年報』24号(2006年発行)に掲載する「自由投稿論文」「研究ノート」および「書評リプライ」を募集します。投稿を希望される会員のの方は、『年報』23号に掲載される編集規定、投稿規定、および執筆要項をご覧の上、審査用原稿(3部)を2005年11月末までに編集委員会事務局までお送り下さい。会員諸氏の奮っての投稿をお待ちします。

なお、明星大学で編集委員会事務局を担当するのは今秋の次回大会時までです。10月以降は事務局が移動する予定ですので、大会後の『学会ニュース』などでご確認の上、投稿論文等は新事務局宛にお送り下さいますようお願いいたします。

(常任理事 渡戸一郎)

2005年9月までの編集委員会事務局

〒191-8506
日野市程久保2-1-1
明星大学 人文学部 人間社会学科 渡戸研究室 気付
日本都市社会学会編集委員会事務局
電話・FAX 042-591-9238(渡戸研究室直通)
e-mail watado@soci.meisei-u.ac.jp

5. 大妻女子大学教員公募のご案内(締め切り：4月25日)

大妻女子大学社会情報学部より、日本都市社会学会宛に「教員公募」の案内が届いていますので、以下に掲載します。詳しい情報に関しては、同大学のホームページの「教員公募について」(http://www.otsuma.ac.jp/gakuin/upload/phpf8a4_a3345.doc)をご覧ください。

1. 公募の職名： 助教授または専任講師1名
2. 専門分野：
 - A. 教育に熱意があり、地域との連帯・共同研究・まちづくり活動に積極的で、実績のある方。
 - B. 出身学部は問わないが、「地理的空間と社会生活」、「社会環境情報処理論及び実習」、ゼミナール、ゼミナール、卒業研究以外に、社会科学系の次の専門科目から3科目以上の講義を担当可能な方。
「まちづくり概論」「地域開発論」「地域環境情報論」「環境保全計画」「環境教育論」「現代都市論」「企業環境論」「都市環境論」「環境社会論」「社会情報調査論及び演習」など(順不同)
3. 応募資格： 2006年4月1日現在 年齢が40歳位までの方

修士以上の学位を有するか、同等以上の実績、業績のある方

4. 採用予定日：2006年4月1日

5. 提出書類：1)履歴書(指定の書式に準拠、写真貼付、押印)

2)教育研究業績目録(指定の書式に準拠)

3)主要研究論文の1編、副論文2編の別刷りまたはそれらのコピー(主要研究論文の1編について1000字以内の要旨を添付のこと)

4)研究成果の概要(2000字以内)

5)大学及び短期大学における教職歴(非常勤講師を含む)がある場合には、これまでに担当した授業科目一覧とその内容(シラパスのコピー添付可)

6)上記の専門分野Bより担当可能な専門科目3科目以上、及びその他に担当可能な科目名

7)まちづくりや地域活動などの実績がある場合、それに関する概要(500字程度)及び関連資料

8)照会が可能な方2名とその連絡先(応募者の教育研究業績や人物を熟知、かつ照会が可能な方)

付記：最終選考の段階で、面接と教育研究内容のプレゼンテーションを実施する予定

：応募書類は原則返却しない。返却を希望する場合は送付先宛名を明記し、返信用切手を貼付した返信用封筒を同封すること。

6. 応募締切日：2005年4月25日(月)必着

7. 書類提出および問合せ先：

〒206-8540 東京都多摩市唐木田2-7-1 大妻女子大学社会情報学部社会環境情報学専攻主任 櫻井四郎
(簡易書留にて「教員応募書類在中」と朱書きして郵送)

TEL：042-339-0081(社会環境情報学専攻 櫻井四郎) / FAX：042-339-0044(社会情報学部第2共同研究室)

E-mail：sakura@otsuma.ac.jp

6. 日本都市社会学会年報バックナンバー(13号～22号) パーゲンセールのお知らせ

(限定30セット)

2004年12月11日に行われました理事会にて、学会の知的財産の多方面への伝承/継承の一環として、日本都市社会学会年報のバックナンバーのセット販売(13号～22号)を行う事が決議されました。以下の通り、年報13号～22号の計10冊を4割引の12,600円(送料込)で販売します。

研究室や図書館にもお分けできます。非会員の方々にも口コミで広めていただければ幸いです。

郵便振替用紙に必要事項(セット数/氏名・送付先住所・電話番号など)を明記し、代金を先に振り込んで下さい(郵便振替口座：00140-4-703976 日本都市社会学会)。郵便局より学会事務局に振込の通知が届き次第、お送りします。書類等が必要でしたら、事前に学会事務局(UrbanSocio@chs.nihon-u.ac.jp)までご連絡下さい。

数に限りがありますので、早めをお願いします。

(学会事務局)

矢崎武夫元理事 訃報

慶應義塾大学名誉教授で本学会会員の矢崎武夫先生が、さる1月30日ご逝去されました。享年88歳。矢崎先生は、シカゴ大学で学ばれ、その後『日本都市の発展過程』(英訳、Social Change in the City in Japan)、『日本都市の社会理論』を出版され、日本の都市社会学の発展と日本都市の国際的な理解に多大な貢献をされました。本学会では、1985-86年度に理事を務められたほか、1991年の香港中文大学における学会開催にあたって仲介の労を執られたと聞き及んでおります。葬儀にあたり、本学会として献花し、学会を代表して後藤事務局担当理事が参列いたしました。矢崎先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌。

*矢崎武夫先生は、日本都市社会学会発足時の世話人、1985-86年度理事を歴任。2005年1月30日逝去、享年88歳。

(日本都市社会学会会長 松本 康)

矢崎武夫先生を偲ぶ

畏友藤田弘夫氏から矢崎武夫先生のご逝去の知らせを受けたのは、1月31日未明のことであった。実はこの数年、先生のご容態については何度か耳にしていたのだが、忙しさにかまけて連絡を差し上げるのを怠っている間に永遠の別れとなってしまった。いまとなっては口惜しさだけが残る。

私が先生に初めてお会いしたのは、今から四半世紀以上も前のことである。先生のご意向もたしかめずに、三田キャンパスの講師控室(当時、先生は出講の際、ここを利用していた)に無理矢理押しかけていったのだから、きわめて異例な「出会い」であったといえる。大学院の矢崎ゼミは実質的に先生と藤田氏と私の三人だけから成る小さな学問文芸共同体であった。私の大学院生生活の前半は、この共同体で毎週、出版されたばかりの社会学、人類学関連の英書をかたっぱしから読む(正確に言えば、読み飛ばす)というものであった。いまなら、それは実にスリリングな日々であったと回顧することができるが、当時の私には「苦痛」以外の何ものでもなかった。だから博士課程への進学とともに、先生が香港中文大学の客員教授として赴任することになったときは、正直いってホッとしたものである。「苦痛」を私なりに真摯に受け止めることができるようになったのは、後年、カステルとかロジキヌ、さらにルフェーヴルといった人びとの著作を仏語辞典をめくりながらひもとくようになってからである。テキストを読むことは、時代を生きる者にとってまさに自己了解に等しいということを、知らず知らずのうちに学んでいたのである。

私事にわたるが、(私は)1986年に『都市社会学の基本問題』で慶應義塾大学から学位(社会学博士)を取得した。いまでも鮮明に覚えているのは、そのとき主査をつとめられた矢崎先生がしるした審査報告書の内容である。先生は自らのスタンスの対向にある拙著にたいして徹頭徹尾批判を加えられた。それはまったく妥協を許さないものであった。しかし最後にひとつ、それでも論理の一貫性には透徹したものがある、と締め括っている。先生の『日本都市の発展過程』、『日本都市の社会理論』は不朽の名著としていまなお斯界において読み継がれているが、それらの基層にリベラリズムとブルーラリズムの豊かな水脈が流れているとみるのは、果して私ひとりだけであろうか。

私はいつのまにか、(私が)先生にはじめて学んだときの先生の年齢に達してしまった。そして自分の仕事があまりにも卑小であることに忸怩たる想いとらわれているが、先生が身をもって示された研究者のあり様というものに少しでも近づきたいと考えている。またそうした点で、孤高の都市社会学者矢崎武夫氏は私のなかで永遠に生き続けるに違いない。先生のご冥福をお祈りいたします。

東北大学大学院文学研究科教授
吉原 直樹

学会事務局より

- ▼ 次号の学会ニュース第71号は、「第23回大会特集号」として、大会プログラム、シンポジウムのより詳細な紹介、自由報告要旨、会場案内などを中心に編集し、7月下旬頃にお届けする予定です。
- ▼ 長年、本学会のためにご尽力いただきました矢崎武夫元理事の追悼文を掲載致しました。矢崎先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。